

第2回 東京農業大学校友・南米親睦会の報告

期 日： 2018年6月10日～12日

場 所： パラグアイ共和国アスンシオン市

主 催： 東京農業大学校友会パラグアイ支部

宿泊場所： ホテル内山田（アスンシオン市 Constitucion No.763）

国別参加人数：	国 名	校友	同伴	小計
	ブラジル：	8人	2人	10人
	アルゼンチン：	5人	—	5人
	ペルー：	3人	—	3人
	チリ：	2人	—	2人
	日本：	7人	3人	10人
	USA：	1人	—	1人
	<u>パラグアイ：</u>	<u>6人</u>	<u>3人</u>	<u>9人</u>
	計：	32人	8人	40人

主な日程と内容：

10日（日）： 出迎え ・ 歓迎夕食会（19：00より）

11日(月): アスンシオン市内・郊外視察(7:30発)

(振替祭日) 郊外で昼食

郊外視察

パラグアイ東京農大校友会館訪問

送別夕食会(19:00より)

12日(火): 見送り

.....

懇親会の主な経過とまとめ

6月9日(土):

参加者の一番早い到着は、サンパウロ経由でアメリカより午前5時に到着。

その後、午後1時頃、サンパウロ経由で日本からの4名が到着。

午後6時にはブエノスアイレスからアルゼンチン5名、チリ2名が到着。

10日よりの懇親会と考えていたが、飛行機便の都合で前日に12名が集合。

パラグアイの校友は9日集合にしていたので、夜10時過ぎには全員到着し

た。その為、急遽、9日夜はホテル食堂で前夜祭を開催した。

前夜祭で、今回の懇親会のためにデザイン・作成したアルミ材を利用した看板

バナーをお披露目、皆が、その出来栄を褒めてくれた、

チリを含めての久しぶりの再会で、前夜祭も大いに盛り上がった。

6月10日(日):

飛行機便の関係で前夜半過ぎに、ペルーの3名が到着。

サンパウロより長距離バスを利用し10名が、朝7時に到着。

車3台総出でバスターミナルに出迎える。80歳に近い先輩二人も元気、

午後1時過ぎの飛行機でサンパウロより3名到着。昼過ぎに、全員揃う。
今朝、早くからゴルフを楽しんだ4名以外で、ホテル近くの食堂で韓国料理を食べる。経費は一人当たり10ドルの個人負担とする。

食事後は散歩しながら、ホテルに全員帰還。

夜7時過ぎより、歓迎夕食会。ホテルの食堂は日曜休業なので、近くの中華料理店のひと部屋を貸し切る。チャーターバス、その他車両で全員移動、歓迎会司会はパラグアイの堤和子校友。三好吉清校友会会長の挨拶の代読、参加各国代表の挨拶、参加した若い校友の紹介など、順調に歓迎会も進む。その場で、さっそく来年の懇親会の開催地が話題になり、チリ開催が総意で決まる。校友二人のチリ、それも林学の同期生、様々な問題もあるだろうが、同期生の連帯で一仕事やり遂げる雰囲気。

明朝7時半のバス出発もあり、夜9時半過ぎに、歓迎会を終了。

食堂庭で集合写真を取り、ホテルにチャーター車で全員引き上げる。

中には、酒を都合して、夜遅くまで、飲んだ校友もいた。

6月11日(月)：　　パラグアイは12日の祭日が繰り上げられ、今日が振替祭日一朝7時半、ミニバス2台に参加者全員が分乗。パラグアイ校友も案内役として、2台に分乗する。チャーター車1台が、バス先導の為に先行。アスンシオンの中心街、政府官庁街を見ながら、中央市場に入る。祭日だが、家族の買い物客で大変な混雑。その後、郊外に向かう。パラグアイの民謡に歌われるウパカライ湖を訪問、湖畔の別荘地や高台の新興別荘地も見ながら、昼食会場に向かう。昼食はドイツ系パラグアイ人がホテルも合わせて経営する場所。そこには近在の校友子弟も参加してくれた。昼食後、パラグアイの若い校友3名は明日の勤めの為に、帰途につくため、一行と別れバスターミナルに向かう。残る一行は昼食後、近くの町にある日系団体の施設を訪問し、パラグアイ日系活動の一端を知る。その後一同、アスンシオンに隣接する町にある東京農大校友会館に向かう。校友会館は1987年落成なので、早くも築30年。かつて、イグアス移住地の校友子弟が合わせて10名ほど(横田5名、久保田2名、堤2名ほか)、前後して寄宿し、大学に通学。最近は、日本から来た若者に借家している。以前は、借家賃延滞などで、一時は荒れた校友会館も借家人を替え、また改築も行い、今回の一行訪問までに、なんとか恥ずかしく無い状態となった。

現在の借家人は新潟・長岡造形大学の卒業生。その教授が農大造園学科 OB でもあり、教授は今回ひと月以上、会館に滞在することにもなった。

また、今回の校友会館でのひと時を有効に過ごすため、会館の一部屋を利用し、刺繍、銀細工、木工品などの民芸品の展示即売も行った。

また、歴代農大校長の写真を飾った校友会会議室にある、2基の大机のガラス板の下に、校友の50年、校友会40年に及ぶ、パラグアイでも開拓・移住生活を紹介する写真を展示したが、訪問された校友の好評を得る。

夕闇迫る頃、一行は校友会館を後にし、アスンシオン随一の花弁園芸販売地区を見学しながら、ホテルに帰還。

夜7時過ぎより、一行が泊まった内山田ホテル食堂を借り、送別夕食会を開催。ここでも各国参加者代表や、希望者の発言を得ながら、楽しいひと時を過ごす。また来年のチリでの懇親会開催や、来年8月中旬のサンパウロでのブラジル校友会50周年記念式典についての紹介もあった。

最後に、全員輪になり、日本から参加された小坂秀夫校友のエールで元気に東京農大歌を歌い、青山ほつりを踊って、懇親会日程の幕を閉じた。

8月12日(火)：

早朝の飛行機でアルゼンチンの4名が帰途に着く。朝6時にはバスターミナルからサンパウロ、イグアス移住地、エンカルナシオンなど3カ所に向かう20人に近い校友がホテルを後にする。

数人の校友は、独自の行動をするためにホテルに残る。幸い、全ての校友が無事に帰路につき、事故も無く、第2回校友南米懇親会を終了できた。

今回の開催にあたり、色々ご心配をいただきました東京農大校友会本部の皆様、心からの感謝を申し上げます。

なお、以下に今回の懇親会を通してのまとめを書かせていただきます。

- 1、校友南米懇親会は今回で2回目の開催となった。南米懇親会のきっかけは母校創立125周年を記念し、東京で開催された校友世界大会に参加した南米の校友から、身近なところで、形式ばらず、お互いの親睦を深める南米中心の懇親会開催が話題になった。結果、2017年7月にサンパウロでブラジル校友会の合同慰霊祭に合わせて第1回懇親会が開催され、第2回開催地として、パラグアイ・アスンシオンが決まった。
- 2、第2回校友南米懇親会は成功裏に終えた。それはまず、第1に南米5カ国の

校友が一堂に会すことができたこと。第2に来年はチリ、再来年はペルーで懇親会を開く機運が生まれ、今回参加した当事国校友からも“出来ません！”との声が出なかったこと。第3は、今回の懇親会で、無理をせず、出来る範囲で集まり交流を深めると言う、南米懇親会の見本ができたこと、

- 3、今回の懇親会に、予想以上の参加者を得た理由として次の二つをあげる。一つは、拓殖11期の同期会が懇親会終了後にイグアス移住地で開催され、彼らが懇親会にも出席してくれたこと。パラグアイの農大校友移住の流れを作った杉野農場の源流である農業拓殖同志会志雄塾のOB3名が、それぞれ個人で、また夫婦同伴、家族同伴で参加してくれたこと。
- 4、今回の懇親会を通し各国共通の問題、農大校友の後続移住者の欠如、校友会活動の若い後継者がいないこと、特別留学生制度で農大で学んだ校友が母国に帰国しないことなども話題になった。その中で、パラグアイから3名、ペルーから2名の若い二十歳代の校友が5名参加してくれたことは大きな励みになった。
- 5、今後、校友の後続移住を実現するために、母校の収穫祭で南米数カ国の校友が揃って説明会を開催すること、母校の授業時間をいただいて、授業で説明会を行うことなど、提案が行われましたが、今後、また具体的なことが検討されて行くでしょう。
- 6、なお今回、パラグアイ支部は自己資金を有効利用した結果、懇親会参加者は安い経費で懇親会に参加できたのは事実です。今後も、若い校友の懇親会参加が実現する為に、パラグアイが持つ資金の有効活用の指針の一つが示された様にも感じました。

以上

東京農業大学校友会パラグアイ支部 支部長 合田義雄